

〔書評〕 高田宗平編 『日本漢籍受容史―日本文化の基層―』
(八木書店、二〇二二年一月)

田 中 良 明

はじめに

二〇二二年十一月に刊行された本書は、四センチの厚みとともに世を驚かせることとなった。歴史というものを、狭義に文字史料の存在する時代に限定するのであれば、日本の歴史は、中國文化の受容とともに始まったと言える。中國の文化（學問、思想、技術、制度など）の、日本への傳播の媒介となるのは、勿論そうした知識や技術を身に着けた人間の往來もあるが、海を隔てた兩地域の往來が、古來どんなに困難であったかは、鑑眞や阿倍仲麻呂といった名の知られた人物たちの陰で、いったいどれだけの数の人々が、渡航・渡來を断念したかと、想像に難くないだろう。そうした中で、中國側に日本へと傳播させる意圖があつたかは暫く措くとして、日本側の受容は大きく書籍、つまり漢籍に頼らざるを得なくなった。無論、日本に渡ってきた漢籍には數の上で、あるいは文字資料から読み取って理解できる知識や技術にも限界を覺えた人々が現れ、中國への渡航を志し、留學を果たし、新たな知識を持ち歸つたことも忘れてはならず、また、時折渡來した人々が貴重な情報源とされたことも看過し得ない。しかし重要なのは、その「限界」を、我々

は安易に想定してはならないことである。彼らが希求した文化の重要性や、希求するに至った環境を考える上で、第一に、漢籍受容の実態を知らなくてはならない。

本書のタイトルにもなっている日本の漢籍受容史については、従来書籍や時代に限定された研究が行われたきた。本書の編者でもある高田氏（以下敬稱を略す）にも『日本古代『論語義疏』受容史の研究』（塙書房、二〇〇五年五月）という書籍も時代も限定した研究がある。こうした研究動向は、現在でも大きな変化がないのかもしれないが、本書の驚くべき特徴の一つこそが、そうした枠に縛られず、つまり、二十四本の論考と四本のコラムを収めることによって、特定の書籍に限定せず、古代から近世に至るまでの時代をカバーする構成を持つことである（但し、文學方面の論考が少なく、また、個々の時代の特徴が反映された結果であろうが、例えば中世の部に年號勘文關係の論考が並ぶなど、收められた論考にやや偏向が有ることは否めない）。

本書は收められた論考の数も多く、内容も多岐に亘るため、逐一紹介することはできないが、以下に本書全体の目次上の構成を示し、次いで我が漢學會の若き學生諸氏に向けて、特に儒學・儒教に關わる論考を紹介したい。なお、序文の前に本書冒頭十六頁を飾る「口繪で辿る日本漢籍受容史―古代く近世初期篇―」は、代表的な日本傳存漢籍のカラ―寫真とともに、編者の高田による簡易な解説が記されており、日本の漢籍受容史に限らず、漢籍の歴史を知る上でも、是非一讀されることを願う。なお、左記に記す丸括弧内の記述は、本書の執筆者紹介に記された各執筆者の専門分野である。執筆者の専門分野に興味を持った論考を読むことも、こうした論文集を手取るきっかけの一つである。また、本書の出版社の八木書店のホームページでは、高田が各論考を解説した本書の序文を読むことができる。より詳細な情報はそちらを見られたい。

序―本書の概要― 高田宗平

第一部 古代

1 律令官人と漢籍 水口幹記（東アジア文化史・日本古代史）

2 僧侶と漢籍 池田證壽（國語學）

3 日本古代の典籍に見える神仙思想と洞天説の側面 土屋昌明（中國思想史・道教史）

4 天平勝寶勘奏に關する諸問題―遣唐使が齎したものの影響― 高田宗平（日本古代中世漢籍受容史・漢學史、漢籍書誌學）

5 陰陽道・曆道・天文道・宿曜道と漢籍 山下克明（日本古代・中世文化史）

6 攝關期貴族社會における漢籍收藏の様相 小倉慈司（日本古代史・史料學）

7 日本の醫學知識の受容 松岡尙則（外科學・漢方醫學・醫史學）

コラム 高松塚古墳壁畫とキトラ古墳壁畫の星宿圖 高橋あやの（中國天文學史）

第二部 中世

1 韻書と學問 小川剛生（中世文學・和歌文學）

2 年號勘文と漢籍引文 水上雅晴（中國哲學・日本漢學）

3 年號勘文より見た南北朝期における朱子學の受容 福島金治（日本中世史）

4 中世神道の道教受容―吉田神道所傳『太上説北斗元靈經』版本再論― 松下道信（中國思想〔道教〕）

5 清原家の學問と漢籍―『論語』を例として注釋書と訓點との關係を考える― 佐藤道生（古代・中世日本漢學）

6 中世日本の易神の形成とその後 奈良場勝（日本近世の易學）

コラム 五山禪林の學僧が見据えていたもの―日本文學史における五山文學の獨自性― 中本 大（日本中世文學・漢文學）

第三部 近世

1 漢籍の出版と讀者層―假名草子を基點として― 入口敦志（日本近世文學）

2 漢籍の「讀まれ方」―石門心學の分析を通じて― 大川 眞（日本政治思想史）

3 闇齋學派の『家禮』受容―稻葉迂齋を中心に― 清水則夫（近世日本思想史）

4 江戸中後期好古家による古典籍裝訂・裝具研究について 陳 捷（中國古典文獻學・日中書物交流史）

5 龜門學の儒學觀と經書觀 金 培懿（日本漢學・經學）

コラム 平田篤胤と漢籍 廖 海華（中國哲學）

第四部 文獻研究

1 日本書籍史における漢籍の裝訂と料紙 佐々木孝浩（日本書誌學・和歌文學）

2 『群書治要』―金澤文庫本子部を中心に― 末永高康（中國古代思想史）

3 カラ・ホト出土『春秋正義』單疏本殘葉考―兼ねて近藤正齋手鈔『春秋正義』單疏本を論ず― 虞 萬里（經學・中國歷史文獻・石經學・傳統言語學）

4 林羅山と古活字版―元和四年刊『老子虞齋口義』を中心として― 高木浩明（日本中世文學・書誌學）

5 琉球の漢學―見られた琉球の文化という視點から― 高津 孝（中國文學・中國書誌學）

6 古醫書の未來圖 武田時昌（中國科學思想史）

コラム 漢籍の分類と『日本國見在書目錄』 内山直樹（中國哲學・中國古典學）

一、古代

古代の部には、タイトルを一見して儒學・儒教に關わる論考が無いかに見えるが、卷頭論文たる、1律令官人と漢籍（水口）は、律令で規定された大學寮で學ばれる漢籍や、『令集解』に引用された漢籍を紹介し、經書の注釋書については南朝系ばかりが引用される實態を指摘する。また、學生が任官のために受ける試験において問われる經書理解の實例を紹介しており、科擧制度が導入されなかつた日本において、官吏に求められた儒學の知識を知る上で興味深い。

二、中世

中世の部では、2年號勘文と漢籍引文（水上）と、3年號勘文より見た南北朝期における朱子學の受容（福島）という前述した年號勘文關係の論考が連續する。年號勘文とは、改元の際に新たな年號を定めるために、學者たちがその典據や先例などを朝廷に示した文書である。年號は、中國では漢の武帝期に用いられ始め、當初は呪術的・宗教的な色彩を持つたものであつたが、改元の一事が儒教・儒學の重要事項であるため、年號もまた儒家の手の及ぶところとなつた。水上論考は、年號勘文の漢籍引用について概論し、森鷗外や森本角藏による研究調査についても紹介している。一方で福島論考は、十四世紀以降の年號勘文に朱子學文獻の引用が見られ、舊來の學術・思想との衝突だけではなく、テキスト上の問題が意識されながらも、やがて頻繁に引用されることを指摘する。（本書の構成にはなお疑問が残るが）兩論考を連續して讀めることは、年號決定に關する議論の變遷を例に、經書の古注・新注の受容過程を見ることができ、非常に特徴的で有益な體驗となる。

また、5 清原家の學問と漢籍（佐藤）は、清原家において『論語』の何晏注（『集解』）と皇侃疏（『義疏』）との『論語』經文に對する解釋上の衝突が認識され、『義疏』の解釋を重視したことを指摘する。新注受容以前の古注の受容の實相を知る上で、大變興味深い實例が紹介されている。

三、近世

近世の部では、先ず、2 漢籍の「讀まれ方」（大川）が、「頂點的思想家」を列擧する江戸の儒學史に對して安丸良夫が描いた民衆思想史に批判的檢討を加える。大川論考の本旨ではないだろうが、朱子學的な用語と理解を述べつつ、独自の思想體系を固持した石田梅岩が、朱子學に限らず中國思想上の重要な課題の一つである「公私」問題を避け、個々の「主體者」が職分を全うすることを説いたことが、やがて「主體を再歸化することなしに勞働に埋没していく」ことに繋がること示唆する點は、本論考の冒頭に記された、本學創立の發端となる「漢學振興ニ關スル建議案」が帝國議會に提出される丁度三十年前の漢學者たちの様子と、大川が割愛したその後漢學者たちが果たした役割とともに、我々へ深慮を促すものとなる。漢學會會員に限らず、本學の學生諸氏に一讀を勧めたい。

次いで、3 闇齋學派の『家禮』受容（清水）もまた朱子學受容の一例であるが、唐津藩の政策という場における實踐的な受容という、より具體的な姿が描かれる。また、5 龜門學の儒學觀と經書觀（金）は、朱子學受容後に起こる古學派による反朱子學的思想運動における、孔子・子思・孟子・荀子への取り扱いの差を詳述する。

四、文獻研究

個々の文獻に主題を置いた第四部では、2 『群書治要』（末永）が『群書治要』の諸テキストと『群書治要』に引用

されたテキストを対比し、テキストの變容と校合の実態に迫る。また、3カラ・ホト出土『春秋正義』單疏本殘葉考（廣）は、ほとんど論題通りの内容であり、日本の漢籍受容に觸れる箇所は少ないが、單疏本に關する考察として重厚である。

おわりに

以上、本誌の性質から一部の論考についてのみ紹介した。あるいは論旨に誤解が有るかも知れないが、紹介した各論考に少しでも興味を持って下されば幸いである。本来「書評」としては、若干の批判も加えるべきであろうが、本書についてはすでに東方書店のWeb東方に、郭雪妮氏による書評が掲載されており (https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho/?p=4211)、また、白井和樹氏による重厚な書評も發表されており (『史學雜誌』一三二—一九)、評者の能力と本誌規定の紙幅では、煙草の火を太陽に掲げるような事態となるため割愛した。

但し、本書の構成に見られる偏向については、「はじめに」に記したように疑問乃至は不満を感じざるを得ない。固より大部の書であれば、なかなか理想のみを求めることは困難であろうが、門外漢の期待・希望として特記した次第である。

なお、本稿執筆中に、このような論文集としては珍しく、本書が刊行から一年を待たずに重刷されたことは、本書に對する世間の評價を知る指標となり得ようか。そして、本學のホームページにも告知されたことであるが、本稿入稿の前、二〇二三年九月の末に、本書の編者である高田が、本書を含む漢籍受容史の研究を評價され、西尾市岩瀨文庫より第四回岩瀨彌助記念書物文化賞を受けられた。本書を一讀すれば、未だ功深く榮淺きの感が否めないが、謹んで學兄の慶賀を祝す。